

平成27年度 一般社団法人全日本学生柔道連盟教養講座 概要

実施日：平成27年10月2日（金）

時 間：監督会議時を予定

テーマ：（仮）「スポーツ指導における体罰の歴史的背景」

講 師：菊 幸一 氏 筑波大学大学院 教授 教育学博士

著 書：「現代スポーツは嘉納治五郎から何を学ぶか」

「基礎から学ぶスポーツ概論」

「中学体育実技」

「よくわかるスポーツ文化論」

「基礎から学ぶスポーツリテラシー」

「スポーツ政策論」

「からだの社会学：身体論から肉体論へ」

「スポーツの比較文化学」

「現代スポーツのパースペクティブ」

「スポーツプロモーション論」

「公共性の再構築からみた体育・スポーツシステム再編に関する研究」

「生涯スポーツの多様化とその公共性に関する研究」

「小学校体育科授業研究」

「境界を超えるスポーツ」

「生涯スポーツ体系の構造と変動に関する日英比較研究」

「スポーツの近代史社会学」

学 会：日本体育学会 理事

日本スポーツ社会学会 理事長

日本体育・スポーツ政策学会 理事

その他：秩父宮記念スポーツ医・科学賞 奨励賞 受賞（平成27年1月）

北信越学生柔道連盟 加盟員の心得

北信越学生柔道連盟は、嘉納治五郎先生の提唱した柔道を体現することを目指し、役員・指導者・選手をはじめとする全ての者は、「人間形成の道」として柔道を捉えます。

本連盟の一員として行動する際、以下の行動規範を常に意識・尊重することにより、本連盟の向上・発展を目指し、私たちは多くの方々から応援・信頼される連盟となるように努めます。

1. 尊敬の心

- ・指導者は選手に敬意を払うことを大切にし、選手がもつ潜在能力を引き出し、選手が社会に貢献できる人材となるよう、総合的に育成していくことに努めます。
- ・選手は指導者に敬意を払うことを大切にし、素直な気持ちをもって指導を受けることに努めます。
- ・先輩は後輩に、後輩は先輩に敬意を払うことを大切にし、共に成長する喜びを実現することに努めます。

2. 感謝の心

- ・私たちは常に感謝の心を持ち、その気持ちを行動や態度で示すことに努めます。

3. 謙虚な心

- ・私たちは常に謙虚な心を持ち、自らの向上に努めます。

4. 勤勉の心

- ・私たちは学ぶ者であることを自覚し、学業に対しても向上心をもって取り組みます。

5. 補益の心

- ・我々は一般社会を構成する者であることを自覚し、モラルや倫理の向上に努め、社会に貢献できる人間となることに努めます。

以上の行動規範を意識し、行動することを宣言します。

平成 年 月 日

_____大学 氏名 _____^⑩

大会会場での監督や選手の立ち居振る舞いについて

北信越学生柔道連盟

この取り扱いは、競技としての柔道と教育としての柔道の融合を図り、柔道家としての品格の向上を目指すためのものである。

1. 監督の役割

- (1) 監督は、選手へのさまざまな状況における指示、戦術的なアドバイス、怪我の対応など、選手とのコミュニケーションを取ることを目的とする。
- (2) 監督は、自大学の選手が大会会場に入場してから退出するまでの間、選手の行動に責任を持たなければならない。

2. 試合中の立ち居振る舞い

- (1) 試合が止まっている間（「待て」から「始め」の間）のみ、選手に対して指示を与えることができる。試合続行中は、選手に対して指示を与えることが許されない。
- (2) 次の行為を禁止する。
 - ア. 試合を続行している最中に指示を出すこと。また、選手・監督席が準備されている場合、試合中に立ち上がること。
 - イ. 審判の判定に対し、コメントや批判、あるいは訂正を要求すること、またはこれらに対する遅延行為。
 - ウ. 対戦選手・審判・役員・一般客および自所属の選手を侮辱するような行為または言動。
 - エ. 設備あるいは物品を蹴ったり、殴ったり、叩きつけたりするなどの行為。
- (3) 試合場での服装は原則として、監督は審判員に準じた服装とし、選手はそれに加え、柔道着・チームジャージのみとする。

3. 罰則

上記に違反した場合は、下記による処分を与えるものとする。

- (1) 1回目はジュリーを含めた審判員が合議の上、主審が口頭による注意をする。
※大会委員長や審判長は審判員へ発議を行っても良い。
- (2) 1回目の注意で改善されない場合は、審判長に報告の上、大会委員長または審判長の責任の下にその試合が終了する（団体戦においては全ての試合が終了する）まで、試合場から退場させ、本部席の指定場所で待機させる。但し、選手のみになった場合でも試合はそのまま続行する。
- (3) 次の試合以降は、再び監督行為を許可するが、その後も改善されない場合は、その日の監督行為を許可せず、指定場所にて試合終了まで待機させる。

試合中の立ち居振る舞いについては、選手・当該校関係者（保護者・OB等）も同じ扱いとし、試合場のみならず観客席もその対象とする。違反した場合は、全て監督が罰則を受けるものとする。

※補足説明

- ① 投げたときに無意識に出てしまう発声（例として、「ヤー」「ヨイショ」など）に関しては許容する。但し、その後の「有効!!今のはあったよ!!」という類の言動は禁止行為（イ）と見なし、罰則の対象となる。
- ② 試合続行中であっても、戦術的アドバイスを含まない一般的な応援（例として「ファイト」「頑張れ」）などは選手を励まし、試合をアクティブなものとするため許容する。但し、戦術的アドバイス（例として、「胸を合わせろ」「頭を上げろ」など）は、禁止事項（ア）とみなし、罰則の対象となる。
- ③ ことばやジェスチャーによる技の効果や積極的姿勢のアピールは禁止行為（イ）と見なし、罰則の対象となる。
- ④ 対戦選手の消極的行為（偽装攻撃や消極的姿勢等）についても「あー」「はいはいはい」などと発声し、反則を要求する行為は禁止行為（ウ）と見なし、罰則を与える。
- ⑤ 原則として、柔道着・チームジャージ・審判員に準じた服装（スーツ等）以外は、試合場（観客席は含まない）への立ち入りは認めない。試合に敗退した場合も同様とする。
- ⑥ 柔道特有のウォーミングアップ（打込や投込）は受取ともに柔道着を着用して行うこととする。

いわゆる「仲間を鼓舞し、試合をアクティブなものとする行為」は許容する。但し、「相手の反則をアピールするなどのネガティブな行為」は厳に慎むべきである。また、ことばやジェスチャーによるアピールは審判員に対する威圧・強要行為と考えられ、審判の尊厳を傷つける行為に他ならないため、監督や選手は自制する必要がある。

試合時におけるガッツポーズ等を含む礼法の取扱い

北信越学生柔道連盟

柔道の根本原理は「精力善用」「自他共栄」である。

試合は上記原理を達成するために行う修行の一つであり、試合によってその道が完結するものではない。試合における対戦相手は敵ではなく、その修行をともにする同志である。その同志に敬意を払わずして、世に補益などできるはずがない。対戦相手には当然、敬意を払うべきである。

本連盟では、指導者・選手が柔道家としての品格の向上を目指すために、試合時におけるガッツポーズ等を含む礼法の取扱いを以下に定める。

1. 礼法

柔道試合における礼法については、講道館柔道試合審判規定では次の（１）（２）のように定められている。

（１）趣旨

礼は、人と交わることにあたり、まずその人格を尊重し、これに敬意を表することに発し、人と人の交際をととのえ、社会秩序を保つ道であり、礼法はこの精神をあらわす作法である。精力善用・自他共栄の道を学ぶ柔道人は、内に礼の精神を深め、外に礼法を正しく守ることが肝要である。

（２）立礼

直立（気をつけ）の姿勢をとり、上体を静かに曲げ（約３０度）、両手の指先が膝頭の上・握り拳約一握りくらいのところまで体に沿わせて滑り下ろし、敬意を表する。この動作ののち、上体を起こし、元の姿勢にかえる。この間の時間は通常呼吸で約一呼吸（約４秒）である。

直立姿勢は、両踵をつけ、足先を約６０度に関き、膝を軽く伸ばす。頭を正しく保ち、口を閉じ、眼は正面の眼の高さを直視する。両腕を自然に垂れ、指は軽くそろえて伸ばし体側に着ける。

※国際柔道連盟試合審判規定では、「全ての立礼は腰のところで約３０度の角度であること」と定められている。

（３）礼は相手選手と揃えて行うように心がける。独りよがりな礼法にならないように注意をすること。

（４）以下の礼が試合時には散見されるが、選手は厳に慎むこと。

ア）膝屈伸のような（腕で上体を支える）礼

イ）首を曲げるだけといった会釈に近い礼

ウ）両手を腰にあてたまま行う礼

2. ガッツポーズ

（１）勝ち名乗りを受ける前に行うを行った場合、主審は選手に服装を正させた後、口頭にて指導を行ったうえで試合を終了させることとする。

（２）勝ち名乗りを受けた後に行うを行った場合、主審は選手が試合場内であれば呼び戻し、口頭にて指導を行う。

（３）すでに試合場内を出た後に目に余る行為を行った場合、主審は監督と選手の位置まで出向き、両者に注意を行う。

（４）試合者ではない者（その他選手や応援者）が行った同様の行為に対しては、あまりにも目に余る場合に限り、審判員が合議の上、監督に対し注意を行う。

3. その他の感情表現

（１）敗者は試合中に、畳を過度に叩いたりするなどの感情表現は控えること。主審は選手に整列を促し、服装を正させた後、口頭にて指導を行ったうえで試合を終了させることとする。

（２）試合終了後、周囲の施設や物品に対しての八つ当たり行為を確認した場合、主審は選手を試合場内であれば呼び戻し、口頭にて指導を行う。試合場外であれば、主審は監督と選手の位置まで出向き、両者に注意を行う。

（３）相手の人格を無視するような言動は勝負が決した後でも、従来どおり「反則負け」となる。

4. 審判員は選手に対する指導は公式の場で行うことを原則とする。上記2. 3の方法はあくまで参考とし、審判員の裁量で指導を行うものとする。-4-

平成 27 年度
柔道 MIND プロジェクトの取組

(公財) 全国高体連柔道専門部

1 インターハイ・高校選手権

- (ア) プログラムへのポスター掲載
- (イ) 会場内のポスター掲示
- (ウ) 監督会議等での啓発活動 パワハラ・セクハラガイドの冊子配布等
- (エ) 大会挨拶・プログラム挨拶等での柔道 MIND 活動の説明

2 各地区・都道府県大会

1 と同様の活動を行う

3 都道府県協会・連盟との連動

- (ア) 都道府県担当者と高体連専門部の連動を促進する。
- (イ) 都道府県競技団体との情報共有を図る。
- (ウ) 地区別 MIND フォーラムへの参加の促進を行う。

4 その他

- (ア) MIND の横断幕・ポスターの都道府県への貸出と、配布を全柔連にお願いする。
- (イ) 全国の高等学校で発生する問題等の早期発見と対応・事後処理を、全柔連と協力して行う。
- (ウ) 都道府県専門部へ最新情報を提供できるよう全柔連と協働する。

柔道 MIND プロジェクト

2015・6・5

日本中体連柔道競技部

本橋 順二

1)

* 11 月下旬～12 月上旬（グランドスラム東京）

* 全国中学校柔道大会（8 月 17～21 日）

上記において、日本中学校体育連盟競技部会（柔道）を開催

* 全国中学校柔道大会監督会議

コンプライアンス委員会より

強化委員会より

2)

* 講道館講習会

中学校柔道指導者講習会

（各都道府県委員長＋開催地指導者等総勢 120 名程）

3)

* 全国中学校（教科）柔道指導者研修会（日本武道館・全日本柔道連盟・文部科学省）

各都道府県 2 名参加（伝達講習を実施）

4)

* 東京都中体連柔道専門部

総会（4 月） ・ 審判講習会（5 月） ・ 強化練習会（8 月）

上記 3 回において下記テーマで講習会を実施

指導者講習会「運動部活動指導者における健全な指導のあり方」

◎『柔道は人間教育』をモットーに、中体連は義務教育の場でもありますので、各関係機関にもご理解、ご協力をいただき、各大会や研修会、講習会などで啓蒙活動を行う。

各都道府県及びブロックによる取組(暴力・体罰・セクハラ根絶)について

平成26年9月調査

1	北海道	各地区の総会及び、専門委員会などでの冒頭の地区会長挨拶の中で体罰・暴力の根絶について話して頂くように要請。全道大会の会長挨拶の中でも、体罰・暴力根絶の内容を盛り込んで話した。
2	青森	会議で各地区中体連事務局、各競技専門部へ口頭で説明した。
3	岩手	会議において口頭で触れられるとともに、部活動の意義や大会趣旨等にも触れ、適切な部活動運営の在り方について確認した。
4	宮城	開催する評議委員会において、各都市・各専門部へ資料を配付し会長より説明する予定。
5	秋田	県教委中体連担当指導主事から文部科学省より出ている「運動部活動での指導のガイドライン」を資料に、説明・研修予定
6	山形	監督会議や開会式で挨拶、専門部ごとの会議の中で触れながら啓発活動を行っている。また、県大会のプログラムにも掲載している
7	福島	各学校理事が出席する各支部、各地区中体連の会議において指導者としての行動の取り方や暴力、体罰、セクハラについて資料を配布し、具体的な事例を通して学校理事から各学校顧問へ指導をするように各会長より説明
8	茨城	常任理事会、競技部会において、会長より口頭で説明をした
9	栃木	理事会の会議資料表紙に、毎回「体罰根絶のスローガン」を提示している。
10	群馬	①年度当初から、会議があるたびに通知を増刷し、参加者に配布した。特に、年度当初の競技部総会では、会長から参加者(県内各競技部の運営委員300名ほど)へ話をし、その内容を各都市で確実に下ろしてもらうよう働きかけた。②9月に県内各都市中体連会長、各都市専ら会長、各専門部委員長を対象に講演会を実施。体罰や暴力を講演内容の中心においてもらった。今後の取り組みについて ①年度当初の会議で、必ず体罰や暴力の根絶等について、資料を使い話をしていく。②年2回の強化委員会議で、話をしていく。(取り組みの課題があれば事務局へあげてもらう)
11	埼玉	「本県では昨年度より全ての中体連諸会議において暴力・体罰根絶について資料等示して議題にしている。」ということで、完全なる根絶を目指している。
12	千葉	5月の総会の折2時間ほど早めに設定し各支部及び各専門部の中心的な役割の方々を呼び、講演会を行って周知徹底をはった。
13	東京	都教委の年間予算 本部、21部合わせて600万円配付された。21部で年間1～数回実施している。本部も11月4日(火)の都中体連研究大会で福島大学の白石豊教授の部活動の指導のあり方等について講演してもらう予定
14	神奈川	昨年度は、県体協、県高体連と共催で「みんなで考えよう、神奈川における人間教育の場としての部活動指導のあり方と暴力根絶に向けた集い」を行った。前県体協会長の山下泰裕様に「スポーツを通じた人間教育における指導者のある姿」について講演。また、北京オリンピック卓球女子の監督を務めた近藤欽司様等をパネラーに迎え「人間教育の場としての部活動指導のあり方と暴力行為根絶」と題してシンポジウムを行った。神奈川県中体連としても、3つの特別委員会において「運動部活動における、健全な指導のあり方について」という検討課題を掲げ、それぞれ意見交換を行った。今年度も、特別委員会では、昨年度に引き続き「運動部活動における、健全な指導のあり方について」に検討している。
15	山梨	①県中体連理事会で 資料を配付し説明した。②昨年度より 本連盟独自に 県役員理事会の折に 講師を呼んで学習会を開催している。(8月の理事会時)
16	長野	「円滑な大会運営へのお願い」を群市・地区・県大会の監督会議(監督・外部コーチ全員参加のもと)の際に競技部長(担当校長)より、記載事項をすべて読み上げ徹底を図っている。また、各競技プログラムにも掲載している。
17	新潟	●年度当初 年度当初の会議で、県中体連会長が挨拶で「指導者の資質能力の向上」について説明した。その後の諸会議で、郡市・地区会長、郡市・地区事務局長、競技部長等が再度、注意喚起を行った。 ●今後 冬季大会や今後の会議でも同じように行う予定。
18	富山	評議員会や専門委員会等、会長のあいさつ内で触れている。資料の提示やスローガンの掲載等はないが、年間を通して、暴力・体罰等をなくす呼びかけを行っている。本年度から取り組んでいる「ベストマナー賞」もその取り組みの一つ。主体は生徒だが、それを取り巻く顧問や指導者、保護者も大いに関係してくる内容で、競技部長等もそのあたりを理解している。今後も、「暴力・体罰・セクハラ根絶」等に向けて、会議の折に触れていきたい
19	石川	今後行われる研修会において、高体連と合同研修会を企画し、資料等において会長より説明を行い、その後に協議・検討する予定。
20	福井	福井県中体連合同会議(競技部長・副部長、各地区理事長、常任委員)で体罰・セクハラ根絶にむけた注意喚起をお願いしている。また、県教委の取り組み「運動部活動での指導の充実」にむけて、「運動部活動での指導のガイドライン」を確認したり、学校校活動目標・指導方針が優秀な学校を紹介している。
21	静岡	4月の理事・評議員会、5月の校長会幹事会、競技力向上委員会、調査研究委員会、評議員部長会の年度当初の県諸会合にて、県総体大会スローガンとともに、部活動運営上の留意点として「体罰を根絶する」ことに関し、文書に掲載し、理事長・会長より説明をした。後半は中体連大会が駅伝のみであるため、2月評議員部長会にて来年度提案の中で文書に掲載し、理事長より説明する予定。
22	岐阜	特になし
23	愛知	・理事会の場で資料を配布し、事務局より説明した。・顕彰式、評議員会の場で、県教委から説明した。
24	三重	県大会の時に、各競技の監督会議で、専門委員長(専門部長)より説明を行った。
25	滋賀	県中体連の全役員を対象に「体罰禁止にかかわる研修会」を開催した。本部役員、専門部長(校長)、専門委員長(教諭)等、計64名が参加し、中体連会長と理事長が説明した。
26	京都	大会開催前に各校へ注意喚起の文書を発送した
27	大阪	会議で(公財)日本中体連指導者養成講習及び高体連の体罰根絶ルールにかかわり、会長より説明した。
28	兵庫	暴力・体罰・セクハラ根絶に限定ではなく、部活動全般における指導(通知)。県中体連理事会において、役員と競技委員長に説明して理解を求めている。また、県内加盟中学校に配布している「中体連必携」にも県教育委員会体育保健課からの文書を掲載。今後の研修会、理事会等においても継続的に説明をする予定
29	奈良	各評議員会・理事・専門部長・専門委員長会議において資料配付し、会長より説明
30	和歌山	理事会で資料を配付し、説明する予定。
31	鳥取	特になし
32	島根	県中体連の理事会および専門部会で、資料を配付し、会長より説明
33	岡山	●県中体連総会の前に研修会を開き、会長挨拶で説明するとともに、大学の講師を招いて研修。●県中体連の会議で、会長より説明。また県教委を招き、資料を配付説明。
34	広島	11月11日に行われる本県運動部活動研究大会に講師を招いて「スポーツ指導者の役割・心得」について研修し、同会において先日程行われた文部科学省委託事業「運動部活動指導の工夫・改善支援事業」の伝達講習会をする予定
35	山口	9月19日に県教委と共催の「体育・保健体育セミナー」において体罰根絶について触れる
36	徳島	特になし
37	香川	定例の会の中で、県中体連会長および県教委保健体育課担当指導主事より説明をした。
38	高知	・理事会において、資料を基に協議し、その内容を各地区中体連を通じて各学校に周知した。・県内の運動部活動指導者を対象に研修会を実施した。
39	愛媛	研究大会(12月4日開催)において、資料配付し会長より説明の予定。愛媛県教育委員会が作成している「部活動運営ガイド」を再活用する考え。
40	福岡	県専門委員会、各競技の監督会議において、資料配付し会長・理事長より説明した。また、各競技で独自にリーフレットを作成し、関係者に配布するなど、取り組みを行っている。
41	佐賀	理事研修会・専門部研修会で周知徹底を図っている。
42	熊本	これまでの会議にて当然体罰の禁止等は触れてきており、暴力、体罰、セクハラ根絶について取り立てて特に取り組みはなし。
43	長崎	暴力・体罰については県内中体連会議にて根絶宣言を行ったが、セクハラなどについては触れていない。
44	大分	県総合体育大会の前の総監督会議(各都市理事長・各専門部長出席)において参加各チームへの徹底と大会期間中に起きた場合の対応の確認をした。セクハラについては特に取組をしていない。
45	宮崎	①評議員会2回・競技専門部2回(大会前抽選会・専門部180名参加)理事会(3回)を通して毎回会長より説明 ②県内全中学校(148校)へ「運動部活動ハンドブック」を配付。
46	鹿児島	①4月の県中体連評議員会にて、県教委保健体育課担当指導主事より指導講話の中で標記の件についての話。②5月、7月の専門部長会にて、会長及び理事長より標記の件について絶対にあってはならないこととして口頭にて説明。
47	沖縄	27年度の会報に指導方針として掲載予定

※「特になし」→各都道府県の各種会議や大会開会式等において、都道府県会長等からの呼びかけ・注意はしている。

九州	九州中学校体育大会におけるチーム関係者の暴力行為に対する対応」を定めている。これを毎年6月に確認。
近畿	理事会において、(公財)日本中体連指導者養成講習に関わり説明した。
東北	東北中体連においても今後の理事会・役員会等で話題にあげながら、共通理解をはかっていく予定。

運動部活動顧問及び外部指導者等の暴力・暴言・セクハラ等に対する
日本中学校体育連盟としての考え方(案)

平成 27 年 5 月
(公財) 日本中体連専務理事 菊山 直幸

運動部活動顧問の暴力・体罰・セクハラ行為が大きな社会問題となっている。各地方公共団体や競技団体等による研修会も開催され、これらの根絶に向けての取組も強化されている。しかし、毎年、暴力・体罰・セクハラ行為の事案が報告されている。

文部科学省、(公財) 日本体育協会、(公財) 高等学校体育連盟等においては、これらの行為に対する罰則を強化している現状がある。

本連盟においても、運動部活動は学校教育の一環であり、生徒の人間教育としても学校全体の雰囲気を明るく元気にしていくにも大きな力を持っていると考えている。そこで、各中学校の運動部顧問及び運動部活動に関わる全ての指導者の暴力・体罰・セクハラ行為等の防止策の一つとして、次のような対応・処置を行うこととする。

なお、本連盟が対応するこれらの行為は、各顧問等の指導者が担当する運動部の活動及びその指導に関わる場面でのこととする。通常の教育活動上における生徒指導場面とは区別するものとする。

記

1 対 象

各中学校に設置されている運動部の顧問及び指導者(外部指導者を含む)

2 判定及びその時期

A：当該校の教職員

1) 公立校 → 行政側の判断による指導措置・処分が確定した時点

2) 私立校 → 学校設置者の判断による指導措置・処分が確定した時点

★ 各都道府県中体連会長より日本中学校体育連盟事務局に報告

B：外部指導者等、学校の教職員以外の者

1) 全ての学校において、当該校の校長または学校設置者による指導措置・処分が確定した時点

3 対 応

1) (公財) 日本中学校体育連盟における全ての役職を停止する

★ 後任の補充については、該当都道府県中体連会長と相談し、該当都道府県中体連及びブロック中体連から選出することを基本とする。

2) (公財) 日本中学校体育連盟主催の大会における監督、コーチ、トレーナー等への登録を禁止する

3) 複数の中学校において指導している外部指導者等は、本連盟が主催する大会におけるコーチ、トレーナー等への登録を禁止する

4 期 間

1) 違反行為 1 回目

確定時点から、その年度も含めて 2 年間とする。(次年度末まで) 但し、その行為についての聞き取りを所属都道府県中体連会長が行い、当該校の校長との協議により日本中体連に申し入れがあった場合は、「厳重注意」または「対応期間を当該年度末までとする」ことも有り得る。

2) 違反行為 2 回目

「資格なし」とする。

◎ 今後の協議予定

①平成 27 年 5 月 14・15 日
常務理事会・理事会
意見交換 → 修正

②平成 27 年 5 月
各ブロック、都道府県中体連における理事会等で説明・意見交換

③平成 27 年 6 月 4・5 日
評議員会 説明・意見交換
→→ 理事会 意見交換、方向性確認

④平成 27 年 6 月 19 日
課題検討委員会 B グループ
各ブロックからの意見収集、意見交換、今後の協議内容・方向について

⑤平成 27 年 9 月 4 日
全国大会対策委員会
各競技部長からの意見収集、意見交換、今後の協議内容・方向について

⑥平成 27 年 10 月 9 日
全国実務担当者会
各ブロック、都道府県からの意見収集、意見交換、今後の協議内容・方向について

⑦平成 27 年 11 月 27 日
課題検討委員会 B グループ
各ブロックからの意見収集、意見交換、集約に向けて

⑧平成 27 年 12 月 4 日
全国実務担当者ブロック代表者会
各ブロックからの意見収集、意見交換、集約に向けて

⑨平成 28 年 2 月 9 日
全国大会対策委員会
各競技部長からの意見収集、意見交換、集約に向けて

⑩平成 28 年 2 月 12 日
常務理事会
ここまでの各会議における協議内容報告、修正案の提案・検討

⑪平成 28 年 2 月 25・26 日
評議員会 提案内容説明・意見交換
→→ 理事会 意見交換、決定？ 発表

平成26年度に発生した都内公立学校における体罰の実態把握について（概要版）

- | | |
|----|-----------------------------------------------------------------------|
| 趣旨 | 体罰の根絶に向けた取組を行うため、都内公立学校における実態を的確に把握する。 |
| 対象 | 区市町村立及び都立学校全2,179校の校長、教職員、児童・生徒全てを対象に調査を行った。 |
| 内容 | 平成26年度中に発生した体罰、不適切な指導、暴言等及び行き過ぎた指導（以下「体罰等」という。）又はその疑いのある事案について調査を行った。 |
| 方法 | 教職員…校長による聞き取り　児童・生徒…質問用紙及び聞き取り調査 |
| 備考 | この調査以外で判明し、報告のあった平成26年度に発生した体罰等事案も含まれている。 |

喪1

表 1	小学校			中学校			高等学校			特別支援学校				合 計		
	24年度	25年度	26年度	24年度	25年度	26年度	24年度	25年度	26年度	24年度	25年度	26年度	24年度	25年度	26年度	前年度差
学校設置数	1,304校	1,299校	1,296校	631校	630校	628校	195校	194校	194校	60校	61校	61校	2,190校	2,184校	2,179校	▲ 5校
本調査への報告のあった学校数	90校 (6.9%)	376校 (29.0%)	195校 (15.1%)	343校 (54.4%)	269校 (42.7%)	182校 (29.0%)	66校 (33.9%)	126校 (65.0%)	78校 (40.2%)	3校 (5.0%)	24校 (39.3%)	13校 (21.3%)	502校 (22.9%)	795校 (36.4%)	468校 (21.5%)	▲ 327校

表 2

(1) 体罰	31人	42人	24人	110人	60人	32人	40人	17人	10人	1人	3人	2人	182人 (21.6%)	122人 (9.5%)	66人 (10.4%)	▲54人
(2) 不適切な行為	54人	327人	104人	458人	326人	155人	30人	90人	56人	-	32人	9人	542人 (64.5%)	775人 (60.4%)	324人 (49.5%)	▲451人
(3) 指導の範囲内	11人	199人	115人	89人	105人	77人	17人	71人	57人	-	12人	12人	117人 (13.9%)	387人 (30.1%)	261人 (40.0%)	▲126人
計	96人	568人	243人	657人	491人	264人	87人	178人	123人	1人	47人	23人	841人	1,284人	653人	▲631人

標準

(1) 体罰	懲戒のうち、教員が、児童・生徒の身体に、直接的、間接的に、肉体的苦痛を与える行為 【例】たたく、殴る、蹴る、握る、絞める、長時間にわたる正座・起立（児童・生徒に指示して行われた場合を含む。）
7. 不適切な指導	児童・生徒の身体に、肉体的負担を与える程度の、微細な有形力の行使 【例】おでこを弾く（デコピン）、手をたたく（しゅっ）、小突く、胸倉をつかんで説教する

②

不適切な行為

ウ. 暴言等

教員が、児童・生徒に、恐怖感、侮辱感、人権侵害等の精神的苦痛を与える不適切な言動（例）罵る、脅かす、威嚇する、人格（身体・能力・性格・風貌等）を否定する暴言、馬鹿にする等

1. 1と2とに抵触等

運動部活動上・スポーツ指導等において、児童・生徒の状況に適合しない不適切な指導（例）目的は語っていないが、その指導内容・方法等が児童・生徒の状況に適合しない指導等

2) 北海道の牧田中

(3) 指導の範囲内

(※1) 平成25年度に作成した「体罰関連行為のガイドライン」で示された体罰分類基準に基づく（別添）

3
表

	小学校			中学校			高等学校			特別支援学校				合計		
	24年度	25年度	26年度	24年度	25年度	26年度	24年度	25年度	26年度	24年度	25年度	26年度	24年度	25年度	26年度	前年度差
教職員	31人	41人	24人	92人	49人	31人	29人	17人	9人	1人	3人	2人	153人	110人	66人	▲44人
外部指導員	-	1人	-	4人	8人	-	5人	-	1人	-	-	-	9人	9人	1人	▲8人
卒業生・上級生 等	-	-	-	14人	3人	1人	6人	-	-	-	-	-	20人	3人	1人	▲2人
授業等の教育活動	31人	42人	24人	47人	38人	25人	16人	8人	6人	1人	3人	2人	95人	91人	57人	▲34人
部活動中	-	-	-	63人	22人	7人	24人	9人	4人	-	-	-	87人	31人	11人	▲20人
教室・職員室	16人	29人	14人	19人	11人	13人	7人	3人	3人	1人	3人	1人	43人	46人	31人	▲15人
校庭・体育館	4人	5人	2人	43人	20人	4人	12人	5人	3人	-	-	-	59人	30人	9人	▲21人
生徒指導室・廊下等	6人	3人	3人	14人	13人	6人	4人	1人	-	-	-	1人	24人	17人	10人	▲7人
その他（校外活動を含む）	5人	5人	5人	34人	16人	9人	17人	8人	4人	-	-	-	56人	29人	18人	▲11人

表 4

体罰の種類	小学校				中学校				高等学校				特別支援学校				合計			
	24年度	25年度	26年度	27年度	24年度	25年度	26年度	27年度	24年度	25年度	26年度	27年度	24年度	25年度	26年度	27年度	24年度	25年度	26年度	27年度
教職員から体罰を受けた児童・生徒数	74人	62人	30人	282人	232人	53人	66人	38人	44人	1人	4人	2人	4人	1人	2人	336人	423人	336人	129人	前年度差 ▲207人
外部指導員から体罰を受けた児童・生徒数	-	1人	-	8人	32人	-	32人	-	1人	-	-	-	-	-	-	33人	40人	33人	1人	▲32人
卒業生・OBから体罰を受けた児童・生徒数	-	-	-	33人	5人	1人	13人	-	-	-	-	-	-	-	-	46人	509人	5人	1人	▲4人
体罰を受けた児童・生徒数 計	74人	63人	30人	323人	269人	54人	111人	38人	45人	1人	4人	2人	4人	1人	2人	374人	509人	374人	131人	▲243人
あざ・内出血など	2人	3人	4人	5人	6人	2人	3人	2人	3人	-	-	-	-	-	-	11人	10人	11人	9人	▲2人
口内出血・鼻血	3人	-	-	5人	1人	1人	3人	-	-	-	-	-	-	-	-	1人	11人	1人	1人	-
擦過傷・切傷	1人	-	-	-	3人	1人	1人	-	-	-	1人	-	-	-	-	4人	1人	4人	1人	▲3人
骨折	-	-	-	2人	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2人	-	-	-	-
捻挫	-	1人	-	1人	2人	-	1人	-	-	-	-	-	-	-	-	3人	2人	3人	-	▲3人
その他	1人	2人	-	3人	1人	1人	1人	2人	-	-	-	-	-	-	-	5人	5人	5人	1人	▲4人
児童・生徒に傷害を負わせた行為者数 計	7人	6人	4人	16人	13人	5人	8人	4人	3人	-	1人	-	-	-	-	24人	31人	24人	12人	▲12人

表 5

体罰の原因	小学校				中学校				高等学校				特別支援学校				合計			
	24年度	25年度	26年度	27年度	24年度	25年度	26年度	27年度	24年度	25年度	26年度	27年度	24年度	25年度	26年度	27年度	24年度	25年度	26年度	27年度
態度が悪い	6人	19人	12人	41人	21人	16人	11人	6人	2人	-	1人	1人	-	1人	1人	58人	47人	43人	31人	▲16人
指示に従わなかった	18人	15人	6人	20人	22人	8人	6人	5人	3人	1人	1人	1人	-	1人	1人	45人	43人	43人	18人	▲25人
技能・知識が求める水準に達していない	2人	-	1人	9人	5人	2人	5人	3人	2人	-	-	-	-	-	-	16人	8人	8人	5人	▲3人
意欲が求める水準に達していない	-	-	3人	19人	3人	2人	8人	2人	2人	-	-	-	-	-	-	27人	5人	5人	7人	2人
問題行動を止めるため	4人	8人	2人	11人	9人	3人	9人	1人	1人	-	1人	-	-	-	-	24人	19人	19人	6人	▲13人
その他	1人	-	-	10人	-	1人	1人	-	-	-	-	-	-	-	-	12人	-	-	1人	1人
感情的になってしまった	16人	24人	15人	39人	28人	22人	10人	9人	4人	-	-	-	-	-	-	65人	61人	61人	42人	▲19人
言葉で繰り返し言っても伝わらなかった	7人	5人	5人	29人	13人	5人	12人	2人	4人	1人	-	-	-	-	-	49人	20人	20人	14人	▲6人
体罰と思っていた	6人	10人	4人	17人	15人	3人	9人	4人	-	-	3人	-	-	-	-	32人	32人	32人	7人	▲25人
人間関係ができていないので許されなかった	-	3人	-	12人	3人	1人	6人	-	1人	-	-	-	-	-	-	18人	6人	6人	2人	▲4人
体罰を行う以外考えられなかった	2人	-	-	6人	-	-	-	2人	1人	-	-	-	-	-	-	8人	2人	2人	1人	▲1人
高い成績、成果の期待に応えようと思った	-	-	-	7人	1人	1人	3人	-	-	-	-	-	-	-	-	10人	1人	1人	2人	1人

平成26年度の傾向について

全体の傾向	<ul style="list-style-type: none"> 体罰を行った者は平成25年度は122人であったが、平成26年度は54人減少し68人となった。平成24年度との比較では3分の1に減少した。校種別では前年度比でいずれの校種も減少している。また、昨年度調査で増加した「不適切な行為」、「指導の範囲内」といった体罰には至らない事例についても、いずれも減少している。（「体罰等の概況」） 体罰減少の主な要因は、部活動における体罰事象の減少で、昨年度調査に引き続き大幅な減少となり平成24年度の約8分の1になった。（「場面」） 事故者の「体罰に対する認識」や「体罰の原因」から、児童生徒の「態度が悪い」、「指示に従わない」状況の中で、「感情的になってしまった」、「言葉で伝えきれなかった」ことから体罰に至る事故者が45人となった。「人間関係から体罰は許される」という認識が減少している。（「体罰の認識」）
体罰を行った者の特性について	<ul style="list-style-type: none"> 体罰を行った者のうち、教職員は66人で、そのうち常勤の教職員は61人。過去に体罰により処分を受けた者は、再び平成26年度に体罰事故を起こした者は4人で、前年度の12人から減少した。 常勤教職員で体罰を行った61人の平均在職年数（都歴）は15.7年で、年齢構成は、20代9人、30代19人、40代10人、50代23人。うち女性は12人。

別添 体罰分類基準

分 類	基 準
①体罰	懲戒のうち、教員が、児童・生徒の身体に、直接的・間接的に、肉体的苦痛を与える行為 【例】たたく、殴る、蹴る、投げる、長時間にわたる正座・起立 (児童・生徒に指示して行わせた場合を含む。)
②不適切な行為	ア 不適切な指導 児童・生徒の身体に、肉体的負担を与える程度の、軽微な有形力の行使 【例】おでこを弾く(デコピン)、手をはたく(しゅぺ)、小突く、胸倉をつかんで説教する
イ 行き過ぎた指導	運動部活動やスポーツ指導等において、児童・生徒の現況に適合していない過剰な指導 【例】目的は誤っていないが、その指導内容・方法等が児童・生徒の発育・発達や心身の現況に適合していない指導、能力の限界を超えた危険な指導
ウ 暴言等	教員が、児童・生徒に、恐怖感、侮辱感、人権侵害等の精神的苦痛を与える不適切な言動 【例】罵る、脅かす、威嚇する、人格(身体・能力・性格・風貌等)を否定する暴言、馬鹿にする、集中的に批判する
③指導の範囲内	注意喚起や指導を浸透させるためにやむを得ず行われた児童・生徒の身体に、肉体的負担を与えない程度の、極軽微な有形力の行使 【例】短時間正座させて説諭する、腕をつかんで連れて行く、頭を押さえる(社会通念上妥当な範囲に限る。)

平成27年度柔道MIND活動について

少年団（東京都道場連盟）
落合 俊保

1. 各大会プログラムにMINDポスターの掲載
 2. 大会挨拶でのMINDの説明
 3. 各道場でのポスターの掲示と冊子の配布
 4. 役員会におけるMINDの説明と今後の活動
 5. 他の団体組織へのMINDの説明と大会プログラム掲載のお願いなどの活動を行う。
- その他、個人指導者への説明活動。

平成27年度柔道MIND活動について

全日本実業柔道連盟

栗原 孝至

主に主催、後援大会における MIND 活動の啓蒙

1) プログラム

- ・会長挨拶文に MIND に関する文章を掲載
- ・MIND ポスター及び暴力根絶宣言を掲載

2) 会場

- ・MIND 旗、MIND ポスター、暴力根絶宣言ポスターの掲示

3) 監督会議で MIND 活動の PR

4) 開会式

- ・会長挨拶で MIND 活動の意義を唱える
- ・場内放送で MIND 活動の実行を呼びかけ

対象大会

1) 全日本実業柔道団体対抗大会

6/6～7 秋田県立武道館

2) 全日本実業柔道個人選手権大会

8/29～30 ベイコム総合体育館

3) 全国産業別大会

11/23 講道館

4) 西日本実業柔道団体対抗大会

5/10 ベイコム総合体育館

5) 東日本実業柔道団体対抗大会

9/20 講道館

平成26年度柔道MIND活動報告

1. 全国視覚障害者学生柔道大会（2014.8.3）

- ・パンフレットへの掲載
- ・参加選手及び指導者への啓蒙活動

2. 全日本視覚障害者柔道大会（2014.11.24）

- ・パンフレットへの掲載
- ・参加選手への啓蒙活動
- ・横断幕の設置

3. 強化合宿（12回実施）

- ・参加選手への啓蒙活動

4. 強化委員会及びコーチミーティング

- ・啓蒙活動計画、周知状況の確認など。

平成27年度柔道MIND活動計画

1. 全国視覚障害者学生柔道大会（2015.8.23）

- ・パンフレットへの掲載
- ・参加選手及び指導者への啓蒙活動
- ・横断幕の設置

2. 全日本視覚障害者柔道大会（2015.11.22）

- ・パンフレットへの掲載
- ・参加選手への啓蒙活動
- ・横断幕の設置

3. 強化合宿（17回実施予定）

- ・参加選手への啓蒙活動

4. 強化委員会及びコーチミーティング

- ・啓蒙活動計画、周知状況の確認など。

平成 26 年度「柔道 MIND プロジェクト」活動報告について（警察）		平成 27 年 6 月 5 日	
		警察大学校 山本	
1 活動概要			
<p>警察柔道では、平成 24 年度から「大会マナーの向上」「スマートな柔道家の育成」を掲げ、各種啓発活動を行っている。</p> <p>この活動の発端は、平成 24 年度の全国警察大会（個人戦 9 月、団体 10 月）において、柔道選手、柔道関係者のマナー等の悪さを警察庁大会事務局から指摘されたことによる。</p> <p><u>指摘された事項</u>（※警察の開会式では、警察礼式により一糸乱れぬ節度ある行動が求められる。）</p> <p>整列が遅い、国歌を歌わない、不十分な礼節、過度な応援、ゴミの不始末、電気の不正使用 通路への毛布等の設置、形演武時の観戦態度、アリーナ内の服装、過度の場所取り等々</p> <p>「ガッツポーズ」についても、団体決勝戦において執拗に繰り返し行われた「ガッツポーズ」に対して、大会会長（警察庁長官）が講評において、「武道というものはフェアな精神を養い、悪に負けない心技体を養うものである。また、武道の礼は、お互いを尊重することで有り、敗者の対する思いやりの精神を養うものである。警察にとって武道は欠くことができない。」と述べ、改善を求められた。</p> <p>また、殆どの警察の柔道大会は、剣道大会と同日、同場所で共催され、常に柔道選手と剣道選手が比較される状況にある。</p> <p>警察部内（組織文化的に）では、見た目もスリムで機敏に折り目正しく礼節を行う剣道家に対する印象が良く、それに相反する面が目立つ一部柔道家に対して良くない印象が持たれている。</p> <p>平成 25 年度の大会からは、各種啓発活動が功を奏し、警察庁大会事務局幹部から「剣道選手も素晴らしかったが、柔道選手は更に素晴らしかった。柔道選手の覇気あるきびきびとした行動が際だっていた。柔道選手もやればできる」と評価を得るまでに至った。</p>			
2 主な活動結果			
月日	研修・大会名	場所(人員)	内容等
5 月 19 日 ～ 5 月 23 日	「指導者研修会」 ※各都道府県師範 (指導者) による 合宿研修	警察大学校 (55 名)	5/19 ～近石専務理事「指導者の地位向上について」1h 5/20 ～宮崎誠司先生「頭部外傷と対応について」2h 5/21 ～村田直樹先生「嘉納師範の教えについて」2h 5/23 ～友添秀則先生「柔道界の暴力根絶に向けて」2h
7 月 3 日 7 月 4 日	「審判員講習会」 ※全国の審判員	警察大学校 (78 名)	試合における「礼法の徹底」「ガッツポーズ」の 取り扱いについて協議
9 月 4 日	「全国警察選手権 大会」 ※審判員会議 ※選手ミーティング	警察大学校 → (78 名) → (197 名)	「大会マナー等の向上について」指示徹底 選手自らが襟を正し模範となる行動をとるよう に、大会、試合中の礼節（礼節・品格等の自発的善 行の実践）、ガッツポーズの禁止（敗者に対する思 いやり）、応援方法、会場の美化など大会マナーの 向上について確認を行った。
10 月 26 日	「全国警察選手権 大会」 ※監督会議 ※選手ミーティング	警察大学校 → (48 名) → (462 名)	試合では、礼節正しく行うとともに、大会終了後 には、選手が自主的に館内のゴミ拾いを行った。
12 月 15 日 ～ 12 月 19 日	「競技者講習会」 ※各都道府県の選 手による強化合宿	警察大学校 (48 名)	・警察庁人事課担当による職務倫理教養 1h 「警察組織から求められる柔道の礼節（心）等」 ・「礼法の徹底」～乱取り前に、立礼、座礼を稽古
1 月 19 日 ～ 1 月 23 日	「競技者講習会」 ※各都道府県の選 手による強化合宿	警察大学校 (48 名)	・広報誌「まいんど」の配布

平成 27 年度「柔道 MIND プロジェクト」活動計画について（警察）	平成 27 年 6 月 5 日 警察大学校 山本
--------------------------------------	-----------------------------

1 活動概要

平成 27 年度も引き続き「大会マナーの向上」「スマートな柔道家の育成」を推進するとともに、礼節を守り品格ある柔道人の育成を主題とする「柔道 MIND プロジェクト」活動を周知し定着化を図る。

2 主な活動結果

月日	研修・大会名	場所(人員)	内容等
7 月 9 日 7 月 10 日	「審判員講習会」 ※全国の審判員	警察大学校 (70 名)	・後藤啓二 弁護士による 「暴力の根絶とセクハラ防止について」 ・「柔道 MIND プロジェクト」活動の周知 ・広報誌「まいんど」の配布
9 月 10 日	「全国警察選手権大会」 ※審判員会議 ※選手ミーティング	警察大学校 → (70 名) → (200 名)	・「柔道 MIND プロジェクト」活動の周知 ・「大会マナー等の向上について」指示徹底 選手自らが襟を正し模範となる行動をとるよう に、大会、試合中の礼節（礼節・品格等の自発的善 行の実践）、ガッツポーズの禁止（敗者に対する思 いやり）、応援方法、会場の美化など大会マナーの 向上について周知徹底する。
10 月 13 日	「全国警察選手権大会」 ※監督会議 ※選手ミーティング	警察大学校 → (48 名) → (462 名)	
12 月 15 日 ～ 12 月 19 日	「競技者講習会」 ※各都道府県の選 手による強化合宿	警察大学校 (48 名)	・「柔道 MIND プロジェクト」活動の周知 ・広報誌「まいんど」の配布 ・警察庁人事課担当による職務倫理教養 1h 「警察組織から求められる柔道の礼節（心）等」
1 月 19 日 ～ 1 月 23 日	「競技者講習会」 ※各都道府県の選 手による強化合宿	警察大学校 (48 名)	・「礼法の徹底」～乱取り前に、立礼、座礼を稽古
2 月 16 日 ～ 2 月 24 日	「指導者養成研修会」 ※各都道府県（次 期指導者候補）に よる合宿研修	九州管区警 察学校 (48 名)	・「柔道 MIND プロジェクト」活動の周知 ・広報誌「まいんど」の配布 ・「柔道の歴史と嘉納師範の教え」について講義 講師未定

2 警察大会における「ガッツポーズ」の取り扱いについて

「ガッツポーズは、武道精神に反し、敗者に対する思いやりが欠如する行動であり、現に慎まなければならない。好敵手が存在して、自己の最高のパフォーマンスが引き出されること理解し、勝負が決着すれば敵味方無くお互いを讃え合わなければならない」

このことを監督（指導者）が事前に競技者に指導しなければならない。

- ・ 喜び勇み弾みで出た様なもの（例～技が決まった瞬間に、拳を腰の高さあたりで握りしめ、すぐに引っ込める程度）は、主審が当該試合者に口頭で指導する。
- ・ 鼓舞する様なもの（例～拳を突き上げ観客席などに鼓舞するものなど）は、主審が合議のうえ、監督を試合場内に入れて、当該試合者とともに、主審が口頭で指導する。
- ・ 審判の制止を振り切り執拗に繰り返す様なもの「柔道精神に反する行為」として「反則負け」を付与する。この場合、「一本」は取り消しとなり、「反則負け」が付与され、相手が勝ちとなる。